

## 7-7. トビイロウンカ

### (1) 発生生態の概要

#### ①我が国における発生経過

トビイロウンカは長距離飛来性害虫である。本種は熱帯・亜熱帯地域原産の害虫であり、休眠性を持たない。そのため、ベトナム以南のイネ周年栽培地域で越冬した個体群の一部が、3月頃に中国南部に飛来、増殖し、その後梅雨の時期に下層ジェット気流に乗って日本に飛来する。6月に飛来した個体群は10月までに3世代を経過し、その後冬の寒さで全滅する。

#### ②被害

本種は、主にイネの株元に成幼虫が寄生して吸汁する。増加すると株元がススで真っ黒になり、激しい吸汁で株が枯れる。水田内に集中分布する傾向があるので、坪状に枯れる、いわゆる「坪枯れ」症状を起こす。また、多発時には水田全体に枯れが広がって反枯れとなる場合もある。坪枯れを引き起こすのは主に9月以降の第3世代幼虫である。そのため、8月下旬～9月上旬に収穫する本県中山間地域の5月上旬植え作型の場合は、坪枯れ発生前に逃げ切れることが多いが、飛来が早く多い年には、中山間であっても8月の坪枯れが発生する場合がある。

#### ③食性

本種はほぼイネ専食性であり、日本ではイネ以外の植物では発育することができない。そのため、イネ科雑草等で増えることもないので、稲刈り後には餌不足と寒さで死滅する。加害された稲わらを加温ハウス内で敷き藁として使用しても、特に問題はない。

#### ④奈良県における発生

トビイロウンカの飛来が多いのは、飛来源から近い九州、中国地方などである。平年であれば奈良県への初飛来は7月中旬以降であり、飛来量も少ないため、坪枯れが発生することはまれである。しかし、近年は飛来源での密度が高まっていることから、長梅雨などで下層ジェット気流の回数が増加すると、早い時期から多飛来が見られ、坪枯れ多発に繋がる場合があるので、発生予察情報などに注意が必要である。

### (2) 防除

#### ①薬剤感受性

本種は、飛来源での抵抗性が発達しており、近年は高度抵抗性害虫となっている。箱粒剤として多用されてきたイミダクロプリド(アドマイヤー)、クロチアニジン(ダントツ)、チアメキサム(アクトラ)

などのネオニコチノイド系の多くに抵抗性が発達しているほか、フェニルピラゾール系のフィプロニル（プリンス）、ネオニコチノイド系のジノテフラン（スタークル/アルバリン）、カーバメート系の BPMC（バッサ）などにも感受性が低下傾向にある。そのため、防除薬剤の選択には細心の注意が必要である。

## ② 苗箱処理

箱粒剤としては、トリフルメゾピリム（ゼクサロン）やフルピリミン（リディア）を含む箱粒剤の効果が高い。その他の成分の箱粒剤については、基本的には残効が低下しており、多発年には被害を抑えきれない。

## ③ 本田防除

本田防除を行う場合、①薬剤感受性の高い薬剤を選択すること、②薬剤が効きやすい若齢幼虫期に防除すること、③低密度のうちに防除すること、④本種が寄生する株元に薬剤がかかるように散布する事が重要である。

出穂期以降の防除は株元に薬剤がかかりにくい上に、多発年には坪枯れ発生直前の多発状態になっていることから、防除としては手遅れである。防除適期は飛来時期によって変わるが、6月に初飛来があった場合には、坪枯れ発生よりも1世代早い第2世代の若齢幼虫期である8月上旬が防除適期である。そのため、発生予察情報に注意し、多発年には8月上旬の防除を励行したい。

散布剤としては、現時点ではシラフルオフエン（MR.ジョーカー）、スルホキサフロル（エクシード）、フルピリミン（エミリア）の効果が高いと考えられる。また、水面施用粒剤としてはジノテフラン（スタークル）があるが、感受性が低下傾向にあるので、防除効果の高い若齢幼虫期を外さないように処理するとともに、処理時には湛水を行って、止水期間を守るなど、十分な効果が発現するような処理を行う必要がある。